

第二部 フェザンにて

(一) フェザンにて

ナース・ステーションで声をかけると、入院の時に世話をしてくれた年配の看護士が気づいてくれた。

「シュミットさんなら恢復は順調です。意識もだいぶはつきりしてきたようですし、多分、もう起きておられるでしょう」

携帯の端末をぼんぼんと軽快に弾く姿がプロらしく手際がよい。何によらず、プロの仕事は見ていて気持ちがいい。自動化だの電子化だのがいくら進んでも、最後の最後は人間の技がものを言つ。彼はそう思ってきたし、今のところ、その想いを裏切られた経験はない。

「ええ、もう完全に覚醒状態です。あの怪我からこの期間でここまで恢復できるなんてすごいですね。華奢に見えたけれど、よほど鍛えていらつしたのかしら」

「まあ、そうだな。護身術には多少の心得はあるはずだ」

「あなたが先生というわけですか？」

「そうかも知れん。この辺は個人情報報という奴だから、質問されても余り答えられないと思つてくれないか？」

「ええ——この調子で恢復できるなら、一月もすれば義肢の装着とリハビリにも入れると思いますよ。どうなさるかは本人の意志ですから、無下にどうとは言えませんが。私からも申し上げますけれど、保護者の方からもおすすめに成つて下さいな」

「いいのがあるかね？」

この看護士にしても、おそらくは義肢のメーカーに知り合いが

いるはずだ。紹介しておいて貰つて損はない。無論、ここはフェザン。無償の好意はあり得ない。彼女は義肢のセールスを紹介し、購入代金の中からキックバックを懐に入れる。妥当な額の、だ。この病院はフェザンでもそれと知られた一流どころ。そのシニア看護士の地位は、不当なりベートを貪つたり、義肢の代金を着服したりした挙げ句に逐われるには貴重すぎる。

そう、手足を失うのはなにも戦争だけじゃない。フェザン第一の産業、つまり通商でも普通に起きる事故だ。彼女がキックバックを懐に入れるチャンスは、年に何度もあることになる。それを失うのは金の卵を産む鶏を絞め殺すようなものだし、フェザン人である以上、その程度の計算ができぬはずはない。フェザンの良いところは金で割りきれるところだ。

場末の病院や潜り医者なら話は別だ。だから、今回は一流どころを選んだということになる。これについては依頼主からのクレームを受ける筋合いはない。

「……ヴァインフリート!!」

ドア越しにさえ、はつきりと悲鳴に聞こえた。

「な——」

「ヴァインフリート……どこ? ヴァインフリートッ!!」

起き上がりかけてそのままベッドに倒れ込んだような、スプリングの跳ねる音と苦痛を必死でこらえる呻きが続いた。

暗証番号を打ち込むと、ドアは音もなく右へスライドした。

彼女は、左手で右の肩あたりを押さえてベッドに横たわつていた。鮮やかな金茶の髪は一本に束ねてあつたが、前髪から横髪にかけての髪が乱れ、白い細面を覆っている。

「あ、やっと目が醒めたかい」

驚いたように顔が跳ね上がり、蒼緑の眸がまっすぐに彼を見上げた。あつけにとられたような表情がまず動き、それでいてそこ

にいるのが彼であることを予想していた顔つきに変わる。

「オーベルスト
『大佐』……?」

「さつそくで悪いが、ここではサンダース軍曹と呼んでくれねえか。その呼ばれ方じゃ、俺の素性がバレバレになっちまう。俺は構わんが、あんたにはそれじゃ都合が悪い。その容態で病院から放り出されたくはあるまいが?」

「サージェント・サンダースですって?」

「ああ。俺の本名がザンデルスなんぞでな。ちようどいい。あんたもコルネリア・シュミットという名前になっている。まあ、その傷だ。ばれちゃいるとは思うが、内乱に巻き込まれて負傷したことにしてある」

これは嘘である。本名はザンデルスなどという名前ではない。

出典は、かつて見たことのある、フェザン製の立体TVドラマ。古い戦争映画。極めつけなことに、地球上での地上戦を題材にした映画だ。妙に気に入って、主人公の名前でフェザンのパスポートと身分証明書を取ったのはもう一〇年も前のことだ。無論、正規のルートではないが、偽造ではない。歴としたフェザン政府発行の本物だ。そう、今、ベッドに横たわっている、この年若い美女が所有しているものと同様に、申請のルートが正規ではないと言っだけの『本物』。

「負傷?」

彼女の硬質な美貌が不審気にゆがむのを見て、サンダース……面倒なので、この物語では彼をこう呼ぶことにする……は自分の右腕、肘のあたりを軽く叩いた。

「え—— あっ!!」

—— 気づいていなかったのか……

打ち合わされるトマホークの激しい剣戟と、縦横に視界を切り

裂く炭素クリスタルと超硬度鋼の煌めき。彼女が打ち込んだ捨て身の一撃が、網膜に残像が残るほどの速さで翻る鮮やかなまでに紅い髪を捉えたかと思えたとき、銀色の閃光が尾を引いてその右腕を薙ぎ上げたのが見えた。

吹き上がった鮮血が驟雨さながらにフロアを打ち、自らが作り上げた血の泥濘の中に折り崩れた彼女を見下ろす赤毛の若者の表情は勝者のそれではなかった。

「手加減をしている余裕はありませんでした。謝るつもりはありません—— ローエングラム侯はもう二度とは言わぬとおっしゃいましたが、あなたに向かつての言葉ではありませんでした。降伏を、シュミットバウアー子爵夫人。降伏なされば、死なせることだけはしません」

勝ち誇った声ではなかったし、声の主の真摯さへの疑問は僅かほども湧かなかった。だが、彼女が従うはずのないことを知っていた。あるいは赤毛の若者もそれを察していたかも知れない。だが、それでも彼の気質は彼女への無条件の死を肯んじ得ない。それが彼の若者の、他に追隨を許さぬ美点であり、同時に限界なのかも知れない。

だが、それでも彼の若者は、この美女のことを知らなさすぎる。そう思わずにはいられないサンダースである。シュミットバウアー子爵夫人コルネリア・ゲルトルーデのことを。

彼女がキルヒアイスの行動を拘束し、親友を案じて駆けつけて来るに違いないラインハルトを、ヴァインフリートが至近に捉えて急襲する。ラインハルトの危急にキルヒアイスが狼狽する……あるいは今度は彼が救援に赴いている隙に、今度は彼女が自爆し、キルヒアイスを旗艦ごと葬り去る。

リップシュタットの戦役直前、それが彼女と彼女の夫であるヴァインフリート・リーフェンシュタール・フォン・シュミットバ

ウアー子爵中將が打ち合わせた結果だった。ラインハルトとキルヒアイス、帝国軍最高の軍事的天才と艦隊指揮官を二人ながらに艦隊戦で葬り去れば、彼らの目論見は成る。だが、それが易々となし得ると考えるほど、彼らはラインハルト・フォン・ローエングラムとジークフリート・キルヒアスを甘く見てはいなかった。彼らが決死の思いでラインハルト・フォン・ローエングラムに挑んだ理由こそ、彼らがシュミットバウアーであるからだ。ゴルデンバウム朝銀河帝国創業期の功臣ヨーゼフ・フォン・シュミットバウアー侯爵を祖に持つ彼らを五〇〇年あまりにわたって縛ったのは、『帝室のため、その身を挺せよ』というルドルフの言葉だった。

歴代、身を顧みず帝室に身を挺してきた彼らに、ゴルデンバウムの宮廷は余りに報いるに薄かった。侯爵家を祖にした彼らが、先代までは男爵家の爵位を伝えるに過ぎず、その継嗣すら、典礼省の小役人に贈賄を拒んだことで一〇年以上も保留される始末だった。

それでも、彼らは自らがシュミットバウアーである、ただそれだけの理由で黄金の有翼獅子に挑んだのだ。致命の傷を負ったからと言って、ゴルデンバウム帝室への反逆者に屈する膝の持ち合わせのあるはずはないのだ。

——理解できることじゃないが……他の何千つという大層な貴族どもの中から一つもそういうのが出てこなかったんだ。それだけ立派と褒めるべきじゃないかね。

サンダースの、それが素直な感想だった。

無論、彼自身は傭兵であり、シュミットバウアー子爵中將とも、シュミットバウアー子爵夫人、つまり、こうして彼が『保護者』となっているこの美女とも金を介した契約以上の関係を持つ意志はない。

「装甲服のインナーが自動収縮したからな。そうでなければ、どうやったって救けられなかったろうさ。それでも輸血は間一髪のところだった」

「——それって……」

エメラルド・グリーンの眸が、窓からの日差しを弾いてくると金色の無機質な光を閃かした。端正なコルネリア・ゲルトルーデの表情が彫像めいて、百戦錬磨の傭兵にすら禍々しい印象を与える光だった。

「……誰の依頼だったの？」

「それを明かすのは依頼主との契約に違反するな」

「依頼主がもう天上の住人になっていたとしても？」

「そうだ」

大したものだな、とまた思う。彼女は依頼主が彼女の夫であることをすでに察しているし、それは正解だった。同時に、その夫がすでに現世の人でないことも明確に理解している。天上の住人云々がその証拠だ。

冷え切った夫婦仲ではなかったどころか、彼女夫婦と本来シュミットバウアー子爵を名のるべき存在、つまり子爵夫人の兄ヨハン・クレメンツ・フォン・シュミットバウアーは、彼らの内一人が欠けても、『もう、自分たちがあの完全な自分たちではあり得ない』と思うほどに互いを必要とし合っていたという。そう、シュミットバウアー子爵中將自身からそう聞かされたし、嘘や単なる惚気を聞かされていると言う印象は全くなかった。

陳腐な表現になるが、『最愛の兄』であり、『最愛の夫』であったはずだ。その『最愛の兄』は二年あまり前に戦死し、そして今、『最愛の夫』をも失った。激昂し、取り乱してサンダースの胸ぐらをつかみ、『答えなさい!!』と喚き散らしても、彼女を非難する者は皆無なはずだ。

その目こそ激情を満たした金色の光を踊らせているものの、シムットバウアー子爵夫人コルネリア・ゲルトルーデの表情はあくまで冷静さを失わなかった。

「契約はわたしを死なせるな……ということだったの？ それを明かすのも、契約違反？」

この問いには答えなければならぬ、と思った。

「——金髪の坊やを殺れなくて、赤毛の坊やだけをあの世行きにできそうな状態になったら、赤毛の坊やに手を出してはならない……つまり、そういうことだ。あんたを救けたのは、付帯事項だな」

「付帯事項？」

「そう。金髪と赤毛を同時か、金髪だけを殺れる。その時は一切手出しなし。そうでなければ、赤毛を死なせるな。まあ、だからあんたを赤毛の坊やに向かわせたんだ、とも言えなくもないか」

つまり、子爵中将ヴィンフリートはラインハルトを仕留め損なった。そういうことだ。

「誰にやられたの？」

省略した言葉を、サンダースは正確に理解した。

「赤毛の坊やさ」

「キルヒアイス上級大将が？」

『バルバロッサ』の主砲で『テューリングン』を吹き飛ばしたのさ

彼らがラインハルト・フォン・ローエングラムと相まみえたインゼリンフルーシュ星域の会戦。その会戦で『テューリングン』は、ヴィンフリートが最後に旗艦として移乗した巡航艦だった。強行接舷した『バルバロッサ』に、コルネリア・ゲルトルーデとサンダースの指揮下に白兵戦部隊を突入させた後、ヴィンフリートは『テューリングン』を『ブリュンヒルト』めがけて最後の突

撃を敢行したのだ。ちょうど『ブリュンヒルト』は『バルバロッサ』に急速接近中であり、速度と距離は完全に回避不可能だった。

その『テューリングン』めがけて『バルバロッサ』の主砲を撃ち放ったのがキルヒアイスだった。『テューリングン』を貫通した射線が『ブリュンヒルト』に命中するものの、『テューリングン』の艦体で減衰する上に、『ブリュンヒルト』の中和磁場と装甲がはじき返せる角度を読み切ったの一撃だった。それ以外に、『ブリュンヒルト』を救う手だてはなかったのだが、結果としてキルヒアイスは賭けに勝った。

『テューリングン』は……どうなったの？」

エメラルド・グリーンの双眸が帯びていたきつい光が初めて緩む。僅かにためらって後、サンダースは事実を告げた。

「轟沈。命中から爆発まで二五秒余り。脱出した救命艇、救命ボツドなし。その後、『テューリングン』の名で発信された救命信号も受信されていない」

それは絶望の知らせ。言葉が事実となつて、理解を生じるまで数秒の時間差を要したようだった。それがヴィンフリートの確実な死として理解されると、コルネリア・ゲルトルーデは天上を仰ぐかのように視線を上空に上げた。

「——わたしを救けたのは……契約の付帯事項だったのね？」

声は、ふるえてはいなかったが、囁きに近かった。

「付帯事項……か。そうとも言えるな。あんたに赤毛の坊やを殺らせないためには、あんたを死なせるわけにはいかなかった。俺にはあんまり政治向きのことは分らんが、子爵中将は彼なりに筋を通したことだろうし、それはそれで立派なことだと思うぜ」

「——それ、気を遣ってくれているの？」

「違うな。気を遣うつもりなら、さっさと退室してるさ」

まだ一〇代前半の少女時代。コルネリア・ゲルトルーデが初め

て訪ねてきたときは驚いたものだ。何しろ、どこから見ても深窓の令嬢以外の何者にも見えなかったからだ。護身術の初歩から初めて、最高難易度の近接白兵戦技を教えるに至るまで、サンダーは、コルネリア・ゲルトルーデの泣き顔や泣き言を聞いた記憶がないのだ。

いずれ人前で泣くような女でもあるまいし、愁嘆場は得意じゃない。

コルネリア・ゲルトルーデの中で感情がその堰を越えそうになつたらさつさと逃げ出すつもりだったが、さしあたりその必要はなさそうだった。もちろん、コルネリア・ゲルトルーデがまったく心を動かしていないわけではない。最悪のあり得る場合として想定していたのか、あるいは余りに強い衝撃のために、それを表情に表し得ないでいるのか。サンダースの見るに、後者の方に見えた。深い淵ほど水の動きは見えにくい。しかし、その動きは重く、大きく、そして止み難いのだ。

「馬鹿なヴァインフリート……」

言葉は長い沈黙の後に続いた。

「ん——？」

「ううん、違うわ。ヴァインフリートは知っていたはずね。わたしがつうしてもシュミットバウアーでしかいられないこと。一人になつても……いいえ、一人になつてしまつたからこそ、わたしはシュミットバウアーでいる以外に選択の余地がないってこと」

「……済まんが、何言つてるのか、よく分からん。俺に言つてるんなら、もう少しわかりやすく言つてほしい。そうでないなら、応答は期待せんでくれ」

「無視してくれていいわよ、『大佐』……じゃなくてサージェント・サンダーズ」

コルネリア・ゲルトルーデは微笑に見えないこともない表情を

浮かべて、サンダーズに視線を戻した。瞳は乾いていたし、頬に涙の痕はなかったが、どこかはつとするほどに無機質で、機械めいた笑いだつた。

「今、何か契約ある？」

「今はないし、しばらくは当てもない」

「仕事しないで食べていけるの？」

「二、三年食うくらいは蓄えはあるし、フェザーンにも一応はつてはある。今後、まるつきり仕事にあぶれるってこともないと思つてる」

「当分の間の護衛とリハビリを頼みたいのだけど？」

「誰が？」

コルネリア・ゲルトルーデは今度ははつきりと愉快そうに笑つた。

「わたしが、あなたに……そうでないように聞こえた？」

「高いぞ」

「幾ら？」

「三万帝国マルク。年契約で」

「安いのか？ 一応、専任でお願いしたいわ」

サンダーズは小さく鼻を鳴らした。彼女が、フェザーンで穏やかな余生を過ごすつもりでないことがそれで分かつた。

「俺一人だからな。護衛とリハビリならそんなもんだ。明日、契約書を持つてくる。そう言や、ここの看護士が義肢に心当たりがあるとか言つてたぞ。あとで当たってみると良い」

「分かつたわ。契約書はお願い……それと、もう一つ——」

「何だ？」

「今日は何日？」

僅かに虚を突かれた思いで、サンダーズはコルネリア・ゲルトルーデの綺麗に整った細面を見つめ、彼女が実際に今日の日付を

知らないことに思い当たる。

「帝国暦で言えば四八八年の九月一五日だ。フェザンに着いたのが一二日。あんたをここに入院させたのが一三日。入院して三日目さ。アレからざっと三週間過ぎてる」

「結局、どうなったのか知りたい。それと、沢山亡命してくると思うけど、どんな人たちが来ているのかも。あとは……帝都の様子ね」

「帝都の様子見は別料金になるぜ。噂の収集だけなら、事のついでだ。無料でサービスするが？ 亡命の方はこれからだろう。俺たちはガイエスブルグじゃなくて途中の宙域からだった。その分、到着も早い。噂じゃ五日か六日頃にガイエスブルグは陥落したらしい。早いので二〇日頃から、おそいになると一〇月以降だろうさ……」

咳払いし、サンダースは極く軽い調子で問いを言葉の形にする。そういえば、シュミットバウアー子爵家には先代男爵の夫人がまだ存命だったはずだが……と。

「要するにはあんたの母上はどうなさってるんだ？」

返ってきたのはやはり軽い調子の応答だった。

「母上はガイエスブルグに移られたわ。ローエングラム侯の捕虜になるような人ではないし、と言って亡命の手配は断られた」

「おい……」

「シュミットバウアーでいるということはそういうことなの。理解してもらえないと思えないけれど」

「お断りだな—— 他に用がなければ、俺は行く。さしあたって

あんたからの契約以外に仕事はない。PDAで呼んでくれれば、駆けつけてくる。遅くとも一〇分以内には」

「分かったわ」

ふっと視線が窗外へ逸れた。エルフを思わせる容貌が、傾きかけた陽光に染まる。エルフそのものに、どこか人間離れた印象をその横顔に与えた。つかの間、サンダースはもう一言、かけるべき言葉を探したが、結局、そのまま病室を出た。嗚咽や慟哭がその背を追うことはなく、それはサンダースの予期したとおりだった。

「ヴィンフリートのバカ……」

サンダースの背でドアが開まるのを見送ってから、コルネリア・ゲルトルーデ……ゲルタは呟いた。頬が乾いたままなのが、我ながら不思議だった。

「二の矢を継いってことなんですよ？」

戦役の直前、フェザンへの亡命準備を併せて進めていた18
ヴィンフリートはそう言って微笑っていた。

「フェザンに逃げたところで、安楽な余生なんかないさ」

それがヴィンフリートの結論だったし、ゲルタにも納得できるものだった。帝国内の内戦に勝ち、覇権を確立したならば、ローエングラム侯ラインハルトが次に目を向けるのは自由惑星同盟であり、フェザンに違いない。

「帝国を手に入れたからって、ローエングラム侯が何年も帝国でくすぶってるはずはない。長くて五年、短けりゃ二―三年で宇宙統一のための行動を開始すると見るね、俺は。シュミットバウアー子爵家の出身者がそういう状況で平穏な余生なんか期待できるわけじゃない」

だから、フェザンへの亡命は生き延びるためじゃない。最後の最後までシュミットバウアーがシュミットバウアーにいるための準備だと思えばいい。

あるいは……とゲルタは思う。ヴィンフリートは本当は彼女を逃がしたかったのかも知れない。逃げろと言って肯うゲルタではない。だから『大佐』^{オベルスト}にあんな付帯条件をつけた契約を与えたのかも知れない。

思い、ゲルタは否定する。

「もう一度、馬鹿をやってもいい、ヴィンフリート？」

ちよつと困つたように微笑い……ゲルタが頑固に唇を引き結んで何かを主張するとき、ヴィンフリートはいつもそんな風に微笑つた。微笑つて、最後には『しようがないなあ』などとぼやきながら、ゲルタの主張を受け入れてくれることが多かった。

「馬鹿を承知で馬鹿をやる。それがシュミットバウアーだろう？」

声が聞こえた、とは思わなかったが、ヴィンフリートがそれ以外の応えを返すとは思えなかった。彼には分かっていたはずだから。たとえ生き延びてフェザンに着いても、彼女がそのまま一介のフェザン市民になれるはずもない。また周囲の状況がそれを許すはずもなく、ゲルタはそれに気づくに十分に聡明だった。

ゲルタはもう一度、大きく息をついて目を閉じた。

やはり涙は出てこなかった。ものすごく大きな感情が胸一杯に詰まつていて、それがのど元にまで溢れているのに、涙や慟哭となつて飛び出してこない。

一〇年あまり間、まだ彼女がミドルティーンの少女だった頃。当たり前のように彼女のそばにいた二人、かえがえのない二人。彼らとさえ一緒であれば、何もかもが完全に完璧だと簡単に信じてのことのできた二人、兄ヨハン・クレメンツも、恋人であり夫となつたヴィンフリートが今はもうどこにもいない。そのことが信じがたく、そして身の内を冷たく痺れさせるほどに——

「寂しい」
そうなのか、と思つた。この感情は寂しさなんだ、と。もう、

兄も夫も帰つてはこない。今、シュミットバウアーたり得続けるのは、自分一人しかおらず、今後も増えることはない。

シュミットバウアーであることを捨て、コルネリア・ゲルトルーデ個人に戻る——そんな選択肢は一瞬も脳裏に浮かぶことはなく、恢復しきつていない身体の要求するままに、ゲルタは再び眠りの淵に我が身を沈めていった。

穏やかで心静かな眠りはもとより期待していなかった。

精神の落ち込みが肉体の恢復を制約することがあるかと言われれば、ゲルタは『その通り』と答えるだろう。四年前に、目前でジークフリード・キルヒアイスに射殺されるという形で兄を失つたとき、彼女は一時期、自己保存の本能をすら放棄した。ヴィンフリートの存在と看護がなければ、そのまま生命への執着をさえ手放していただろう。

意識回復以来、医師や看護士が目を見張るほどの速さで身体が恢復していくのは、要するにはヴィンフリートの死が、兄のそれほどには自分の精神を深く傷つけていないからなのではないか——
ゲルタは時としてそう疑う気分になる。

たあ
弱やかと表現される外見とは裏腹に、幼いときから風邪一つ引いたことがなく、かつ『大佐』のもとで鍛え抜いてきただけに肉体的な健全さには自信をもっていた。恢復の速さは、だから、精神^{こころ}もまた肉体並みには健康さを保っている証左なのだろう。

九月末には介助なしに歩けるようになり、月が明けると義手のためのコンサルの日程を決めることになった。

「ご予算次第でどのようなタイプもご用意できますが……」

看護士の紹介で会ったフェザーンの義肢専門会社のセールスは、さまざまなカタログを繰り広げて見せた。上は簡単なセキュリティ・チェックならすり抜けるほど、見た目もほとんど生体と変わらないほどのものから、下は地球上で文明が『事故』と称するやり方で人間の手足を奪うようになって以来の原始的な機構のものまで……写真と価格表付きのそれが、ゲルタに『地獄の沙汰も金次第』というフレーズを連想させた。

セキュリティ・チェックのことは措くとして、右腕を失う前のレベルの体機能は恢復したかったが、セールスの弾きだした数字は予想通りになりの高額だった。ヴィンフリートが用意していた亡命費用は、彼がもともとブラウンシュヴァイク公爵家の連枝だけに少ない額ではなかった。それでも、義手のオーダーと装着・調整、さらにそのあとのリハビリ費用と『大佐』への報酬までを見れば、手元に残る余剰の費用は数年分の生活を賄うにも満たなくなる。

だが——とゲルタは軽く肩を竦める。気にする必要はない。その数年後、フェザーンはもう今のフェザーンではなくなっているだろうし、自分がコルネリア・シュミットとして平穏な生活を続けているはずもないのだ。

「いいわ、とにかくこれで詳細の見積もりをお願い」「承りました」

嬉々としてゲルタのオーダーを受けたところを見ると、これだけの高額な義手の商談は余り多くないらしい。ただ、『大佐』が保証したとおり、足下を見てふっかけてきているわけでないようだった。機能に見合った正当な価格であることは、少し調べただけでも十分に裏付けが取れた。

「スケジュールもね。リハビリは最低で六ヶ月くらいかかると聞きましたけれど、そんなものかしら？」

「……そうですね、奥様……フラウ・シュミットと紹介されたので……ならば、かなりスポーツをなさっておられたと伺っておりますので、その半分から四分の三程度で、ごく普通の日常生活が送れるようになられるか、と」

「三ヶ月から四ヶ月半といったところですね」

ちよつと長すぎるかも知れないが、今日明日中になにかしなればならないというタイム・スケジュールのあるわけでもない。それに『リハビリ』の相手はあの『大佐』……サージェント・サンダースが呼びにくいので、最近のゲルタはカーネル（英語では大佐の意味がある）・サンダース、などと呼んでいる。なぜかサンダースは思いっきり嫌な顔をするのだが。とにかく、あの『大佐』なのだ。悲鳴を上げるほどに辛いリハビリにはなりそうだが、期間の方は保証付きだろう。

「よろしいですわ。いつ、連絡を下さいます？」

「そうですね。このクラスになりますと、設計とも調整しないと

いけませんので……五日ばかり頂けますか？」

「ええ。でも五日して連絡を下さらなかつたら他をあたります。

宜しい？」

「この首に代えまして」

調子の良いこと……とゲルタは笑った。彼女の素性を諳じていれば、そんな冗談は言えない。彼女を本気で怒らせれば、彼の首は本当に宙を舞いかねないのだから。勿論、フェザーンで犯罪者になるつもりは、少なくとも今のゲルタにはない。

義肢会社のセールスと入れ替わるように、サンダースの来訪が告げられた。

「ミスタ・サンダースが？」

『大佐』ことサンダースはこのところ、余りゲルタを見舞いには来ない。ほとんどの時間を軌道エレベータの軌道ステーション側で費やしているらしかった。

「亡命者が増え始めた」

一〇月に入るとフェザーンに入国する帝国人が急増し始めたという。リップシユタット戦役でラインハルト・フォン・ローエングラムに敗北した貴族連合軍の生き残りだ。上は侯爵クラスから下は帝国騎士、あるいは門閥貴族の使用人らしい平民まで、その数は数万から、場合によっては数十万に達するかも知れないという。

「フェザーン政府としては金か技術のある連中、最悪でも軍用艦艇で逃げてきた連中は受け入れる。それ以外は入国を拒否して帝国、というかローエングラム侯陣営に引き渡すつもりらしい」

多分、傭兵仲間のルートからだろう、サンダースはそんな情報を持ち帰ってきている。ついでだがと前置きして、『ローエングラ

ム侯はもうローエングラム侯じゃない。ヘルツォーク・フォン・ローエングラム公だ。そうだと注釈を入れてくれている。

「ローエングラム公……ね？ 戴冠する準備のつもりかしら」

「さあな。まあ、すぐじやあるまい。まだ帝国の中もごたごたしてるし、戦役の後始末やら、論功行賞やら、やることはいろいろあるだろうさ。皇帝なんぞいつでもなれる」

最後の言い方はゲルタの神経に強かに障ったが、『皇帝、我に何かあらん』が信条の傭兵にしてみれば当然の考え方である。

いずれにしても亡命者が急増すると言つことは、帝国からの情報量が急増するということでもあり、帝国内の状況や戦役に最終的な行く末を知りたいというゲルタからの依頼に従う絶好の機会でもある。

だから、サンダースはフェザーンの玄関口に張り付いていたは

ずなのだが、急に戻ってきたのだ。何かあったと見た方が良い。

「大丈夫ですか？」

「疲れていないし、身体の調子も良いから」

顔色を変えないことに自信はある。今日も検診とセールスとの応対以外のほとんどの時間をリハビリ室と情報端末の前で過ごしていたのだが、疲れは感じなかった。と言うか、そうして時間を埋めていないで、空白の時間が生じた瞬間、自分がたった一人であることを強烈に意識させられる。周囲数千キロ、いや数千光年にわたって、彼女の知る人がいない。彼女を知る人もいない――

無論、『大佐』を除いては、だが、彼とはあくまで金と契約で結ばれた間柄でしかない――そのことを意識し始めると、足下の地面が消え失せて、果てしもなく落ち込んでいくような、そんな錯覚を覚えるようになった。孤独なのかも知れなかったし、虚無と

言う者なのかも知れない。今は分析を拒否する以外になかった。

「ミスタ・サンダースともう一人、お連れの方がいらっしゃるようですよ」

やや意表を突かれた。

「もう一人？」

「ご年配のご婦人ですけれど？」

「年配のご婦人？」

心当たりがなかった。

ゲルタは了承のサインに小さく顎を引いて見せた。

「構わないわ。お通ししてくださる？」

看護士が立ち去り、待つこと数分。野太い声がインターホンを震わせた。

『サンダースだ』

「待っていたわ、お客様？」

「珍客だ。入って良いか？」

「どつぞ」

ドアの幅一杯にサンダースの巨軀が現れた。ゲルタは一瞬、一人なのかと錯覚し、それが誤りなのに気づいた。上体はすっかり隠れているか、確かにサンダースに従う人物の脚が見えている。

「コルネリア？」

呼ばれた。

一瞬、声の主が分からず、ゲルタはきよんとする。

サンダースが脇によけ、巨体の陰に隠れていた人物が姿を現したとき、ゲルタは椅子から跳ね起きて棒立ちになった。

初老というにはまだ若すぎる、しかし、十分に長い年月をその眸に宿してきたことを伺わせる五〇代くらいの女性がそこに立っていた。ゲルタの金茶色の髪、エルフを思わせる細面は確かにこの女性譲りのもので、ただ、帝国人女性の平均を遙かに超えた上背とエメラルド・グリーンの眸は父譲りだった。

彼女に生を与えた女性、先代シュミットバウアー男爵夫人ゲルトルーデ・フォン・シュミットバウアー、つまりゲルタの母がそこに立っていた。

「お……母さま……ご無事で！」

「ええ、つい二日前に」

サンダースが咳払いをした。

「その、なんだ、母上を突っ立たせておくのも、シュミットバウアー子爵家の流儀かい？」

セールスとの応対で腰掛けていたベッドサイドの椅子に母を誘い、ゲルタ自身はベッドの上に戻る。ゲルタの、肘から先がだらりと垂れ下がったトレーニングウェアの右腕に、男爵夫人は目をしばたいたようだった。

「いきさつはこの方から聞きました」

ゲルトルーデ——ゲルタが母からミドルネームを貰い、かつ

通称がミドルネームの短縮形なので、この辺が混乱しやすい。こしばらくはゲルタをコルネリア、母親の男爵夫人をゲルトルーデと呼ぶことにしたい——は、サンダースを指し示した。右腕を失った経緯については改めて語る必要はないし、ヴィンフリートの死についても、戦いの結末も同様のこと……母の意図するところを、コルネリアは正確に察した。

「どつやつてお母さまを？」

これはサンダースへの質問だった。

サンダースは顎を掻いた。

「貴族連合軍の残兵で戦艦を売ろうとしてる奴がいるって聞いてな、網張ってたのさ」

それが戦艦『ヴィルヘルミナ』。先代帝国軍艦隊司令長官ミュッケンベルガー元帥の乗艦。指揮を執っていたのはフレイゲル男爵の参謀役だったレオポルド・シューマツハ大佐だった。これまで提督とは名乗っていても、名ばかりの連中がほとんどの中、たたくき上げの軍人であるシューマツハは、情報収集の絶好のターゲットだった。

さっそくシューマツハとコンタクトしたサンダースだが、彼が引き連れてきた亡命貴族の中に、ゲルトルーデ・フォン・シュミットバウアー男爵夫人の名を見出だして仰天することになった。ガイエスブルグを脱出した亡命船は途中、航路を見失い危うく遭難するところを『ヴィルヘルミナ』率いる、これも亡命艦隊に救助され、その艦隊とともに辛うじてフェザンまでたどり着いたのだ。

「でも、お母さま……」

「アンズバツハ准将とヘル・ホフマンが逃がして下さったんです」戦いで当主を失い、キルヒアイスの辺境攻略とフェザンの口座凍結で資産のほとんどを失った貴族たちの子女の内、密かに希

望者を募ってガイエスブルグを脱出させたのだという。

「結局、フェザンなり同盟なりでのたれ死にとなる可能性も高いですが、いまさらローエングラム侯に頭を下げられぬと言う方があれば、お逃がせしめよう」

ホフマンはそう説明し、ゲルトルーデ・フォン・シュミットバウアーを含む何十家族かが応じた。

ロベルト・シュピーゲル・クルツバッハとは、ゲルトルーデも顔見知りだった。ガイエスブルグ陥落間際、その「シュピーゲル」がゲルトルーデのもとを訪れたのだ。

「シュミットバウアー子爵夫人はローエングラム侯との戦いの後、再起を期してフェザンに逃れられた。先代男爵夫人として子爵夫人のお力になっていただきたい」

これはシュミットバウアー子爵中将ヴィンフリート卿からの依頼でもあります——「シュピーゲル」はそう言い、ためらうゲルトルーデを強引に亡命者リストに載せた。

「これをヘル・シュピーゲル」から預かってきました。あなたがどうしても必要とするものだ」と

母から差し出されたものを受け取ったものの、コルネリアはそれが何かを理解できずに眉間に深いしわを寄せた。大きさは大型の名刺入れと言ったところだが、表面の微細加工といわずしりとした重さと言い、コルネリアにはそのケースの素性がすぐに分かった。母のような貴婦人が持つにはおよそ不釣り合いなもの——

—— 防爆容器である。

不得要領な娘の表情に、ゲルトルーデは薄く笑った。コルネリアは思い出す。見た目、貴婦人以外の何者にも見えない母を、ヴィンフリートは翼を納めた美しい猛禽に喻えたことがある。それがあつたのはこの母の本質を捉えた形容なのかも知れない、とコルネリアはそれ以来しばしば思うのだ。

「ヘル・シュピーゲル」はそれをヴィンフリート卿からあずかった、と仰っていたわ」

「ヴィンフリート……から!?」

驚いて防爆容器を改める。容器の裏側にセンサーらしい小さな穴が開いている。

「生体認証?」

指を当ててみる。かすかな電子音が響き、ロツクの外れる機械音が容器を震わせた。ふたが開き、中身が姿を現すとサンダースが眉をつり上げた。

「ほう……これは、これは……」

コルネリアにもそれが何か分かった。カード。硬質で透明な輝きと手触りはトマホークに使われている炭素クリスタルを連想させた。あるいは本当に炭素クリスタル製なのかも知れなかった。

調べたいことができた、とサンダースがカードを手にして席を外している間、コルネリアは母から断末魔のガイエスブルグの様子を聞かされた。

開戦時、戦闘艦艇一六万隻、兵員二五〇〇万人を数え、ラインハルト陣営の五割増の優勢を誇った貴族連合軍だったが、相次ぐ敗北に、その優位は急速に失われた。インゼルインフルーシュ星域会戦の後、貴族連合軍にはもう余力は残っていなかった。

「一戦し、金髪の孺子の首を奪ればよいのだ。それですべての敗北は償われる」

フレイゲル男爵などは豪語し続けたと言うが、最後の出撃に際しては、男爵の取り巻きぐらいしか、彼らの勝利になお信を置くものなどいなかった。実際、彼らは一戦して敗滅し、ついにガイエスブルグをラインハルトに明け渡したのだ。

フリーゲル男爵の訃報も、コルネリアにとつては『やはり』という感懐しかもたらさなかつた。彼が亡命者のリストに名を連ねていれば、逆の意味で意外であり、裏切られたような印象を受けたかも知れない。最後まで戦艦と戦艦の一騎打ちを呼号し続け、オレンジの髪ビッテンフェルトの猪にすら『相手にするな』と一蹴されたあたりも、コルネリアに『あの男爵らしい』と苦笑をもたらすものだった。

「お母さま、ご存じだったら教えて下さい」

コルネリアが問うたのはキルヒアイスのことだった。

アンスバツハによるラインハルト暗殺未遂事件とキルヒアイスの遭難は、すでにフェザーンにも聞こえていた。最初はキルヒアイスがラインハルトの身代わりに暗殺されたという内容であり、後に帝国政府からの正式発表でキルヒアイスは重傷を負ったが生命は長らえたと修正された。だが、フェザーンでは帝国政府の発表は嘘であり、キルヒアイスは死んだと信じる向きが少なくないのだ。コルネリアにとつてもキルヒアイスの生死は今後の行動を決める上で大きな要素となる。どんな情報も無視できなかった。

「あなた以上のことを知っているとは思えないわ。途中、傍受というのね、オーベルシュタイン中將からグリューネワルト伯爵夫人にキルヒアイスの提督の死去の連絡が入ったと聞かされました」

「オーベルシュタイン中將が……？」

半白の髪、異様な光を放つ義眼の男を、コルネリアは思い浮かべた。先帝死去の直後、コルネリアが公開した先帝の遺書に對して、『もう一通あるはずだ』と指摘してきた、あの暗鬱な表情の人物。

「それ以外はほとんど暗号というのかしら、読めないものばかりで……その内、リヒテンラーデ公がキルヒアイスの提督の暗殺を唆したということで捕縛された。そのあたりまでね、わたしの知っ

ているのは」

「リヒテンラーデ公はどうなつたのですか。陛下は？」

「陛下はご無事。御退位もされていないし、新無憂宮から余所にお移りになつたと言つた話も聞いていない。でも、リヒテンラーデ公はご自殺、公の一族は女と一〇歳に満たない男の子以外は全員処刑」

「処刑……？」

「女と子供は終身流刑になつた……これはローエングラム侯が自分でそう発表したのを聞きました」

キルヒアイスが死んでいようといふまいと、その遭難の責任をリヒテンラーデ公に押しつけ、一気に権力を奪取したということだろう。リヒテンラーデ公には気の毒に違いないが、立場が逆転していれば、一族……というほどでもないだろうが、一族族滅の目に遭わされているのはラインハルトの方だったはずであり、政治と軍事の世界に身を置くものとしては覚悟すべきことだったとも思う。

ただ――

コルネリアが感じていたのは、ラインハルトの措置に対する、ある種の違和感だった。

ラインハルトのことは恐るべき敵、彼女が最も忠節を誓うべきゴールデンバウムフリードリヒ四世の帝室の存立そのものを危殆にさらすことになる最大の危険要因、排除すべき反逆者と思つてゐる。だが、同時に先帝フリードリヒ四世が、ラインハルトの手による華麗な滅びを望んだ――のではないかとコルネリアは思つてゐる――ように、堂々たる敵だった。

そのラインハルトへの印象と、今回、リヒテンラーデ公一族への、嗜虐的とも言える処置の間に矛盾はないだろうか。

思い、コルネリアは思い出した。ヴィンフリートとともにイン

ゼルインフルーシユ星域会戦の計画を立てていたときのこと。あのとき、ヴァインフリートは言わなかったか？

「赤毛か金髪か、残すとしたら赤毛だな」

赤毛は金髪がいなくなっても結構良い支配者になる。しかし、金髪は赤毛をうしなったら抑制をうしなつて暴走し、ルドルフ大帝の醜惡なエピソードとなるか、あるいは先帝同様に一切を虚無の中で見送るようになるか、そのいずれかだろう、と。

リヒテンラーデ公への仕打ちに、何かしらこれまでのラインハルト・フォン・ローエングラムらしからぬ、恣意に任せた加虐趣味が現れ始めていないだろうか。これは、あるいは赤毛……キルヒアイスを失った証左とも言えるのではないか。

考え、考えるのを止めた。キルヒアイスの生死はいまだ不明。確証がない以上、不確実な情報や推測を元にして軽率を図るべきではない。

自分の考えに沈み込んでいたから、この時、コルネリアは母がさらになにごとかを口にしようとしているのに気づかなかつた。

また、ちょうどサンダースの再訪が告げられたために、母と娘の会話はそこで中断を余儀なくされた。

「カードのことを調べてきた」

開口一番、サンダースはそう切り出して、テーブルの上にカードを置いた。コルネリアの目には、一刻も早く手放さないと不幸に襲われると信じているかのような仕草に見えた。

ノルトシュテルン・バンク

「北星銀行のカードだ」

サンダースはフェザーンでも最大の銀行名を口にした。

「そう書いてあるじゃないの、ここに」

安っぽい印刷ではない、やや厚みのあるカードの表面に浮き彫りになっている文字をコルネリアは指さす。材質から見てプレスではなく、削りだしに見えた。銀行の預金カードとしては異常なくらいに金がかかっているのが異様だ。

「単なるカードじゃねえよ。スペシャル・カードつてやつだ。一〇〇万や二〇〇万の預金じゃ、こんなカードは出ねえ」

言っていることが分からず、コルネリアはしばらくサンダースを見つめた。軽く一〇〇万とか二〇〇万と言うが、それが並みの庶民がおいそれと入手できる金額でないことはコルネリアにもすぐ分かる。

「じゃあ、どうして持ち逃げしなかったの？」

「現金を引き出せてたならな。ただ——俺も命が惜しい」

「なぜ？」

「そんな生やさしい銀行じゃねえよ。……つてか、このカードの素性だとか預金額だとか知ってたから、あんたが自分で出かけていくしかない。つまりはそういうことだ」

「ふん？」

コルネリアは手に取ったカードをためつすがめつ眺めていたが、やがて興味を失ったようにそれを防爆容器の中に戻した。

「分かりました。これはわたしが処理します……ヘル・サンダース、お母さまの宿泊先の手配をお願いします。お手数ですけど。」

わたしも退院先を考えないといけないから、向こう二年くらい滞在できるところがあれば、そっちの方が良い」

「了解。まあ、手頃なところを見繕っておこう」

変な格好だ——ゲルタは容赦なく評した。まるで密林ゴリラの王者

が無理矢理に着込んでいるようで、かえって危険に見える、と。
「向こうのドレス・コードに合わせりゃこういう格好をするしかない。仕方がないだろう」

「片腕がないのはドレス・コードにひつかからないのかしらね」
「行けば分かる」

そういうゲルタもスーツ姿に身を固めていた。背の高い、スリムで姿勢の良い彼女によく似合っているが、右腕の肘から先がないのはどうしようもない。ただ、周囲から視線を吸い寄せているのは、中身がなくてゆらゆらと揺れている右袖ではなく、綺麗に結い上げられた金茶色の髪とその下の端正な容貌だった。道行く男性の過半と、女性のかんりの割合がゲルタに視線を引き寄せられ、その内の何分の一かが彼女の右袖に気づく。ぎよつとする顔は少なく、同情と好奇心が取って代わる。僅かな例外として微かな優越感、何に對してのものなのか、ゲルタはそれ以上を分析したいと思わなかった。

北星銀行に連絡を入れ、素性……コルネリア・ゲルトルーデ・フォン・シュミットバウアー子爵夫人を名乗った……とカード番号(らしきもの)を告げた。少し待たされ、相手が変わって、質問を二つ三つ。他愛のないもの。戦役前のシュミットバウアー邸の住所や、ヴィンフリートの生年月日、ヴィンフリートから求婚された日など。答えるとフェザン市内のある住所と時間を指定された。

「これってかなり危ないパタンではなくて？」

住所を記したプレートが貼られているだけの、古いビルの玄関を前に、ゲルタはサンダースを振り仰ぐ。サンダースも余り愉快そうではなかった。

「危ないだろうな。だが言うだろう。卵を割らなきゃオムレツは作れない、と」

「作れるの？」

「もつぱら卵焼きだ——それに、こうも言う。石橋を叩いて叩き割る」

「誤用でしょう。それは？」

結果的には余り危ないことにはならなかった。あくまで結果的には——

受付で来意を告げると、どこからともなく数人の男たちが現れて彼らを取り囲んだ。

「武器をお預かりします」

言われて顔を見合わせ、結局、サンダースは小型の熱線銃を、ゲルタはハイ・ポリマー製のハンドナイフを差し出すことになった。

応接間は、古ぼけた外観からは想像もできないほどの豪華なしつらえだったが、そこでも数人の男たち、一目で暴力のプロ、おそらくは傭兵と分かる連中が壁際を固めていた。

彼らが室内に入ると、ソファの傍らに佇立していた恰幅のいい銀髪の男が深々と一礼した。皺深い顔は笑顔を浮かべているが、目は水のように笑っていない。

「ようこそ、北星銀行の特別顧客応接室へ。私が副支配人のジョーンズです」

流暢な帝国公用語だった。

「初めまして、ヘル・ジョーンズ。コルネリア・ゲルトルーデ・フォン・シュミットバウアーです」

差し出された手を取り、ゲルタは優雅な一揖を返す。左手だったが、彼女自身、右手を失っているのだから仕方がない。

「こちら、傭兵のザンデルス大佐。本人の希望ではカーネル・サンダースと呼んでほしいそうです」

「これはこれは……」

ジョーンズは笑った。

「ひよつとしてフライド・チキンがお好きでしょうか。ランチに取り寄せても宜しうございますよ」

「一五ピース入りにしてくれ」

「——と申しますと？」

「人生って素晴らしい……一五ピース入りの箱を抱えてそう言ってみるのが俺の夢だったのですね」

「承りました。確かに手配させましょう」

冗談だと思ったが、ジョーンズが本当に部下を呼び、フライド・チキンを手配させたのにゲルタは呆れた。サンダースはそっぽを向いている。

フィッツグレイフェン

「さて、子爵夫人」

「コルネリアで結構です。さもなければフラウ・シュミットバウアー。いずれ子爵号など意味のない時代になっていますし、ローエングラム公はもう子爵号など剥奪させているでしょうから」

「シュミットバウアー子爵家がなおも存続しているかと言えば、私どもの調査によれば存続しております」

ジョーンズは意外な言葉を口にした。

「ローエングラム公にはシュミットバウアー子爵号剥奪措置の要なしと判断されたと聞き及びます」

「ローエングラム公が？」

「帝国典礼省からも子爵号剥奪の公告は出ておりませんゆえ、子爵夫人と呼ばせていただきます」

ゲルタは僅かに混乱する自分に気づく。これはどうしたことだ。リヒテンラーデ公一族を処刑させたときの、あのローエングラム公ラインハルトの残虐さと、シュミットバウアー子爵家の存続……それが名前だけのことであったとしても……を認める寛容さはどこで折り合いが付くのだろう。それとも、これはいずれも

ローエングラム公の為人^{ひととなり}をなす一面だというのだろうか。

「お互いに時間も限られておりますれば、用件を先にさせていただきますでしょう。まず、子爵夫人。子爵夫人のDNA鑑定をお許し頂けますか？」

「本人確認のため？」

「そうです。お時間は取らせません。お髪を一本頂戴します。一〇分待つていただければ、結果が出ます」

「わたしがもしコルネリア・ゲルトルーデでなかったら？」

「そのような方はこちらにはおいでにならなかったことになりません」

ジョーンズの視線の先に、壁にへばりついた男たちの姿がある。ちらとサンダースを見、彼が頭を振るのに、ゲルタも納得した。

構うことはない。自分が自分であることは分かっているのだから、『そのような方はこちらにはおいでにならなかった』なる事態は発生しない。

一〇分後、ゲルタの髪を別室に運んでいった男が帰ってきてジョーンズに耳打ちする。

ジョーンズは頷き、頬を緩めた。

「あなた様がコルネリア・ゲルトルーデ・フォン・シュミットバウアー子爵夫人であることを確認いたしました。従いまして、ヴァインフリート・リーフェンシュタール・フォン・シュミットバウアー子爵閣下からお預かりした預金全額は子爵夫人の相続されるところとなります。なお、相続に当たって、子爵夫人はフェザン政府に対する納税義務を負われることはありません。これは帝国の方の預金であつてみれば、子爵夫人に対して相続に関する諸税の支払いを要求する権利と権限は帝国政府にのみ存在します」

ジョーンズの説明はゲルタの失笑を誘ったが、ふと思ひ直しても見る。帝国政府をローエングラム公ラインハルトの政府と見れば失笑で片付けられるべきことではあるが、今上皇帝エルウィン・ヨーゼフ二世陛下に対してであれば、それはシュミットバウアー子爵としての義務に他ならない。とは言っても、帝国財務省にその旨を申し出て受け入れられるところではないだろうが。

「ローエングラム公は貴族のフェザンでの資産凍結を要求し、フェザンはそれに応じたと聞きましたが？」

「はい。この預金も凍結されておりました。が、正当な所有者が当行へ出向かれ、それを当行が認めれば凍結は解除されます。これはヴィンフリート卿と当行の契約事項でございますれば、他の方々には適用されない特別条項でございます」

「ヴィンフリート……あなたって……」

「思わずつぶやいてしまう。」

「ところで預金総額ですが——」

ゲルタの思ひにかかわらず、ジョーンズは淡々と話を続ける。

「総額で一四六三万飛んで四〇〇帝国マルクとなっております」

「そう一四六三万……」

何気に聞き流しかけ、ゲルタは数字の意味するところに気づいた。

「なんですって!？」

「一四六三万四〇〇帝国マルクと申し上げました。このカードをお出し、先ほど申し上げたような特別の契約を締結させていただく条件として、最低預金額は一〇〇〇万帝国マルク、あるいは相当の同盟通貨^{ディナール}、およびフェザン・マルクと言うことになっております」

「ちよつと、ちよつと、ちよつと待って下さい、ヘル・ジョーンズ。」

ズ。ちよつと、そこで止まつて」

落ち着いて考えてみれば目の飛び出すほどの巨額というわけでは実はない。ブラウンシュヴァイク公爵家をはじめとする門閥貴族は、その最盛期に数百億帝国マルクの資金を運用していたはずだし、リーフェンシュタール家でも、今ジョーンズが口にした数字の数十倍の現金は常時動かしていたはずなのだ。

だが、個人で動かせる現金と考えると、これは桁が違ふ。ヴィンフリートが『二の矢』のためとして亡命資金に充てた額は、これよりも確実に一桁以上少ない。

「これだけの金額を、ヴィンフリートはどのように入手したのでしようか？」

「それもお話しすることが契約に入っております。実は、当行から子爵中将閣下へお支払いした手数料でございます」

「手数料？」

「はい。一昨年でしたが帝国のあるお客様より多額の送金の依頼がございました。その依頼者様に当行をご紹介下さり、かつ帝国側の送金手続きを代行下さったのが子爵中将閣下でございました。当行は依頼者様より規定の送金手数料をいただきましたが、当行の規定ではその二割半から三割は仲介者への手数料としてお支払いすることを定めております。若干の端数が出ておりますが、これはお預かりした資金を当行が運用を委ねていただいております。その結果でございます」

「つまり……この金額は全部わたしが引き継ぐ……ということなのね？」

「左様でございます」

ジョーンズの口調は全く変わらなかった。

「御納得を頂けましたなら、事務上の手続きに移らせていただきます。ああ、その前に昼食の用意が整ったようですので、どうぞ」

さすがにシャンパンでの乾杯とワインは断つたが、ダイニング・テーブルの上に置かれた一五ピース入りのフライド・チキンは断り切れなかった。

「あなた方は本当に銀行員なの？」

問うゲルタに、ジョーンズはやはり目の笑わない微笑で応じたものである。常に顔には笑顔を、心にはゆとりを、それがお客様大切な資金を事故なく扱う上での当行でのモットーでございませう。

もともとフライド・チキンの始末を心配する必要はなく、サンダースが旺盛な食欲で綺麗に片付けてしまった。

「明日は全速力で二〇キロは走らんならん」

「ぼやくサンダースを、ゲルタは無視することにした。」

「で、どうするんだ？」

ジョーンズの言う事務手続き……預金をゲルタの名義に変えること、彼女の相続者を決めること、その他の付帯事項を契約書に盛り込むこと……を済ませて、帰路についたとき、サンダースが尋ねてきた。契約に關してだけはすぐに片付くというものではなかったから、この日の内に決められたのは基本契約の部分だけだった。

「義手を一ランク上げる。その方が便利そうだから。それと、あなたとの契約を変えたい。相談に乗ってくれる？」

「——内容による。相談された内容は他には漏らさない。ただ、こちらは商売だ。商売にならんようなことまで引き受けるつもりはないぞ。まあ、取りあえず、話は明日以降にしてくれ」「どうして？」

ネクタイを解きながら、サンダースはスーツの胸元を指した。

「この窮屈な衣装を早く脱ぎたいんでね。どうにも今日は疲れた」サンダースに同意を示しながら、ゲルタはまだ胸の中程にわだかまっている、釈然としない露のもやのようなものを意識している。一体、ヴァインフリートは何を考え、何のためにこのような巨額の資金を遣していったのか。

ゲルタは知らないことだが、この『多額の送金』とは、ラインハルトがアーサー・リンチ以下を同盟領へ潜入させ、クーデターを起こさせた、対自由惑星同盟の謀略工作のための資金である。総額は二億帝国マルク余りに達し、北星銀行は手数料収入としてその二〇パーセント、四〇〇〇万帝国マルク余りの収入を得たことになる。そして、『依頼者』であるラインハルトと北星銀行を仲介した者こそ、ヴァインフリートに他ならなかった。

ヴァインフリートがその時点で、この巨額の手数料をリップシュタット戦役後を見据えての資金と考えていたかどうかは、その後の史家の調査によっても明らかとはならない。もし、その気であったなら、カードを預ける相手は「シュピーゲル」や先代のシュミットバウアー男爵夫人ではなく、ゲルタであるべきだったはずだからだ。実際に送金の仲介をしたのは「シュピーゲル」か、あるいはゲルトルーデ・フォン・シュミットバウアー男爵夫人であり、ヴァインフリートは何も知らず、ただ名前だけを貸したのではないか、そんな仮説が生まれる所以でもある。ただ、いずれの説にも無理がありすぎ、通説とはなり得ていない。

いずれにしてもリンチが最終的に失敗することは、ラインハルトの計算の内であり、リンチが敗滅した後に、彼と救国軍会議が遣い残した資金がどうなったかなどは、その視界の外だった。まして送金手数料のそのまた仲介手数料が誰の手に入っているように、などもともと個人レベルでの金銭には関心の薄いラインハルト

である。調査の必要性すら認めていなかったとしても不思議ではなかった。

これも、もはや別の物語となってしまうことだが、さらに後になつて、ラインハルトが送金させた二億帝国マルク近い現金(手数領分を差し引いて)の内、ヤン艦隊がハイネセンを制圧した時点でなお五〇〇〇万帝国マルク以上が残されていたことが分かつている。そして、その資金を管理していたのが、当時は救国軍事会議のメンバーだったベイ大佐であつたらしいことも。

この残金の消息は、しかし、宇宙暦七九七年九月のある日をもつて消え、二度と歴史上に浮上してくることはなく、ただ、『J資金』なり、『T資金』あるいは『G資金』などという名で、ハイネセンとその周辺星域の経済史を騒がせることになる。史実と言つよりも喜劇なり悲劇なりの領分に属することであり、ゲルタの関知するべきことではなかった。

ゲルタが義肢会社と改めて連絡を取り、義手を正式にオーダーしたのがこの二日後。彼女が義手の装着手術を受け、退院したのはさらに半月後。帝国暦にして四八八年二月の半ば。リップシュタットの戦火がガイエスブルグでの晩鐘で幕を閉じてから、わずか二ヶ月後のことだつた。退院後、ゲルタは母を伴い、サンダーズが見つけたフェザン市内のアパートメントへ引き移り、サンダーズも彼女たちと同行した。